

児童生徒の英語学習への意欲を高める授業デザイン

—CAN-DO リストの活用を通して—

指導主事 市原 小百合

研究協力員 合志市立合志中学校

教諭 松崎 真理子

研究協力員

合志市立西合志中央小学校

教諭 金子 亜樹

1 課題設定について

平成 25 年 3 月に、文部科学省は、学習指導要領に基づき、観点別評価における「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」について、「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定の手引き」（以下、「作成の手引き」）を作成した。この手引きは、生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し、主に教員が生徒の指導と評価の改善に活用することを目的としている。

さらに、平成 28 年 8 月に、文部科学省は「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」¹⁾（以下、「審議のまとめ」）を公表し、その中で、学習到達目標（以下、CAN-DO リスト）の設定について、次のように述べている。

・・・小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、そこに至る段階を示すものとして段階的に実現する指標形式の目標（CAN-DO リスト形式の目標）を設定する。

（一部抜粋）

文部科学省が実施した「平成 27 年度英語教育実施状況調査」の結果によると、全国的に見れば CAN-DO リストの設定率は高等学校で 69.6%、中学校で 51.1% である。しかし、CAN-DO リストを設定している学校の中で、その目標到達状況の把握率は、高等学校で 30.7%、中学校で 22.2% である。このことから、CAN-DO リストを設定していてもその達成状況の把握が十分ではないことが分かる。

本県でも、平成 25 年度以降、CAN-DO リストの設定が推奨された。本県における CAN-DO リスト設定率は、「平成 27 年度英語教育実施状況調査」の結果によると、高等学校で 100%、中学校で 99.2% である。しかし、研修などで、研修者に各学校での実態を尋ねてみると、CAN-DO リストを作成しているものの、十分に活用できていない状況がある。

そこで、本研究では、CAN-DO リストの活用に関係があると考え、CAN-DO リストを活用した授業デザインを通して、児童・生徒の英語学習への意欲を高めることを目的とした。なお、小学校における実践においては、次期学習指導要領に向けた先行研究的意義を含むものとする。

2 研究の視点

今回、検証授業では、「児童生徒の英語学習への意欲を高める授業デザイン」に向けて、本センターで取り組んでいる授業づくりの三つの視点から述べることにする。

(1) 視点 1【学びを引き出す】について

外国語科及び外国語活動の目標が、コミュニケーション能力を養うことであることは学習指導要領からも明らかである。言語活動において、他者を理解し他者から理解されようとする意識、つまり「相手意識」を高めることで、「積極的にコミュニケーションを図る態度」の育成につながり、コミュニケーション能力が高まっていくと考える。

また、前述した「審議のまとめ」²⁾の中においても、次期学習指導要領の外国語教育の抜本的強化のイメージとして、次のように述べている。

【小学校高学年】

「・・・相手に配慮しながら、聞いたり読んだりすることに加えて、読んだり書いたりすることについての態度の育成を含めた、コミュニケーション能力の基礎を養う。」

【中学校】

「・・・他者に配慮しながら、具体的で身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。」

（下線は筆者による）

本研究では、CAN-DO リストに基づき、児童生徒が学習課題を身近に感じられるような設定を工夫し、言語活動をより「実際のコミュニケーションの場」に近づけることで、児童生徒の相手意識を高めることをねらいとした。

また、個人活動、ペア活動、グループ活動において、それぞれの形態における言語活動を工夫し、それらを関連付けていくことで、児童生徒が自分の考えと他者の考えを比較したり、自らの考えを再構築したり、新しい考えを生み出したりすることなどをねらった。これらの取組によって、児童生徒の主体的な「学びを引き出す」こととした。

(2) 視点2【学びを振り返る】について

「思考の可視化」の観点から、生徒の発想を広げることがをねらいとしたワークシートを工夫し、学習の成果を可視化できるようにした。また、学習活動場面において、CAN-DO リストに基づいて教師からの中間評価や児童同士による相互評価を取り入れることで、児童生徒の学びを全体で共有することができ、児童生徒のメタ認知を促すことをねらった。

授業の終末場面においては、CAN-DO リストの視点から、振り返ることとした。これらの取組によって、思考過程の可視化と振り返りを行い、児童生徒の「学びを振り返る」手立てとした。

(3) 視点3【学びを支える】について

学習活動のねらいに応じて、ICT 等の視覚教材を使用することで、児童生徒が学習内容を理解しやすくし、活動時間を確保することをねらった。

また、授業のめあてやその単元の CAN-DO リストを明示することで、「何ができるようになるか」というその時間のねらいが明確になり、児童生徒が見通しを持って授業に取り組むことができるようにした。

板書については、授業の流れを明示する場所、学習内容を記述する場所、児童生徒の考えを記述する場所などをあらかじめ決めておくことで、児童生徒が授業においても見通しを持つことができ、活動自体に集中できるようにした。これらの取組によって、児童生徒の「学びを支える」こととした。

3 研究の実際（小学校の実践から）

検証1 合志市立西合志中央小学校第6学年
単元名 「Lesson 6 What time do you get up?」
(Hi, friends! 2 文部科学省)

(1) CAN-DO リストと本単元の関連

次の表1は、「西合志中央小学校 CAN-DO リスト」第6学年のものである。現行学習指導要領で重きを置かれている「話すこと」「聞くこと」と合わせて、次期学習指導要領で求められている「読むこと」「書くこと」にも触れ、4技能についての CAN-DO リストを作成した。「読むこと」「書くこと」においては、アルファベットの大文字と小文字、そして自分に関わるものや自分の生活の中の身近な単語の二つに焦点を絞った。

【表1】西合志中央小学校 CAN-DO リスト（6年）

	話す	聞く	読む	書く
6年	○自分の生活の中の身近なことについて簡単な英語表現を使って尋ねたり答えたりすることができる。 ○自分の考えや気持ちについて簡単な英語表現を使って表すことができる。	○自分の生活の中の身近なことについて簡単な英語表現を聞き取ることができる。	○アルファベットの大文字や小文字を読むことができる。 ○自分の生活の中の身近な単語を写真やイラストを参考にしながら、読むことができる。	○アルファベットの大文字と小文字を対応させて書くことができる。 ○自分の生活の中の自分が興味のあることや自分の名前を書くことができる。
	Lesson 1～ Lesson 8	Lesson 1～ Lesson 8	Lesson 1～ Lesson 5 Lesson 6 Lesson 7	Lesson 1 Lesson 2 Lesson 4 Lesson 5 Lesson 8

この CAN-DO リストを基に、各単元の CAN-DO リストを作成し、表 2 の Lesson 6 の単元の CAN-DO リストを作成した。Lesson 6 では時刻の数字や一日の生活に関する語彙、また一日の生活を尋ねたり答えたりする表現が中心となる。そこで、「話すこと」「聞くこと」「読むこと」を CAN-DO リストとした。

【表 2】 Lesson 6 の CAN-DO リスト

話す	聞く	読む	書く
<ul style="list-style-type: none"> ・数字を 1～100 まで言うことができる。 ・一日の生活を英語で言うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・数字の 1～100 まで聞いて分かる。 ・友達の生活を英語で聞くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時刻を読むことができる。 	



【図 1】 第 6 学年の「Can-Do Drops」

また、図 1 は表 2 の第 6 学年の CAN-DO リストを児童向けに一覧にまとめたものである。「話すこと」が赤色、「聞くこと」が黄色、「読むこと」が緑色、「書くこと」が青色に色分けされ、単元ごとにまとめている。このリストは「Can-Do Drops」と名付けられている。本校の国語科での読書活動の中で用いられている手法を取り入れた「Can-Do Drops」は児童にとっても馴染みのある形であり、児童の興味・関心

を高めることにもつながると考える。児童も教師も、一年間の外国語活動の授業を通して、英語を用いて何ができるようになったのかを一目で把握し、共有することができる。「Can-Do Drops」は学習ファイルの表紙に貼り、いつでも見られるようにした。

(2) 本単元の授業設計

本単元は、小学校学習指導要領外国語活動における「コミュニケーションに関する事項」(2)「積極的に外国語を聞いたり、話したりすること」を受け、世界には時差があることに気付き、世界の様子に興味を持つとともに、生活を表す表現や一日の生活についての時刻を尋ねる表現に慣れ親しみ、積極的に自分の一日を紹介したり、友だちの一日を聞き取ったりすることをねらいとしている。表 3 は本単元の指導計画である。

【表 3】 Lesson 6 の指導計画

次	時	学習活動と研究の視点との関連
1	1	<ul style="list-style-type: none"> ○世界には時差があることに気付き、世界の様子に興味を持つ。動作や時刻の言い方を知る。 【視点 1】 相手意識のある言語活動の設定 【視点 3】 CAN-DO リストや授業の流れの提示
2	1	<ul style="list-style-type: none"> ○動作や時刻の言い方に慣れ親しむとともに、生活を表す表現やその時刻を尋ねる表現を知る。 【視点 1】 相手意識のある言語活動の設定 【視点 3】 CAN-DO リストや授業の流れの提示
3	1	<ul style="list-style-type: none"> ○生活を表す表現やその時刻を尋ねる表現に慣れ親しみ、自分の休日について紹介し合う。 【視点 1】 相手意識のある言語活動の設定 【視点 3】 ICT 等の視聴覚教材の効果的な活動
4	1 本 時	<ul style="list-style-type: none"> ○生活を表す表現やその時刻を尋ねる表現に慣れ親しみ、修学旅行の一日のスケジュールを考えて表現する。 【視点 1】 相手意識のある言語活動の設定 【視点 2】 CAN-DO リストに基づく中間評価や相互評価 【視点 3】 CAN-DO リストや授業の流れの提示
5	1	<ul style="list-style-type: none"> ○5 年生に向けて、自分たちが行った修学旅行の一日のスケジュール紹介の発表会を行う。 【視点 1】 相手意識のある言語活動の設定 【視点 2】 CAN-DO リストによる振り返り 【視点 3】 CAN-DO リストや授業の流れの提示

※各時において、主な視点のみを示している

(3) 指導の実際 (Lesson 6 第3時)

【CAN-DO リスト】
 (話す) 一日の生活を英語で言うことができる
 (聞く) 友達の生活を英語で聞くことができる
 (読む) 時刻を読むことができる

【本時の目標】
 グループで協力しながら、5年生に分かりやすく伝えるように、「修学旅行の一日」を考えて表現する。

導入 15分

1 あいさつをする。
 2 復習をする。
 (1) 歌を歌う。
 (2) 既習表現を復習する。

【学びを支える】
授業の流れを提示し、児童が見通しを持って活動できるようにする。
 ◎既習表現に慣れ親しむために、様々な活動を通して、既習語彙や表現を繰り返す。

授業の流れの提示

ジェスチャーゲーム
 伝言ゲーム

What time do you get up?
 I get up at six.
 I get up at six thirty.

展開 25分

3 本時のめあてをつかむ。
 単元のゴール
 5年生におすすめ!
 「修学旅行の一日」を紹介します!
 学習目標 (めあて)
 「修学旅行の一日」の紹介を分かりやすく伝えよう!

【学びを引き出す】
児童が慣れ親しんだ表現を使って、相手に伝えたいような課題を設定する。

I eat lunch at 1.
 I like curry.
 It's delicious.
 単元初めに示したALTのモデル文に追加情報を入れる。

ALTの先生からモデルを示す

4 修学旅行の一日の紹介文を考える。

(1) グループごとに修学旅行の紹介文を確認し、伝え方について考える。
 (2) グループごとに修学旅行の日程について、紹介の仕方を練習する。

◎グループ活動を通して、お互いの紹介を見せ合うことで意欲的に活動に参加できるように工夫する。

(3) 2つずつのグループに分け、他のグループに紹介する練習をする。
 (4) 他のグループからのアドバイスをもとに、それぞれのグループで練習する。

【言語活動】(設定の意図)
 グループになり、相手に分かりやすく伝える工夫をしながら、紹介の練習をする活動を通して、相手意識を高める。

グループごとに紹介文の伝え方を考える

グループごとに紹介の仕方を練習する

2つずつのグループで紹介し合う

他のグループからのアドバイスをもとに練習する

整理 5 分

【学びを振り返る】
 分かりやすい伝え方や友だちのよかったところや、自分が言えたことなどの児童の多様な気付きを出し合い、学びを振り返る時間とする。



相互評価・中間評価で CAN-DO リストを活用

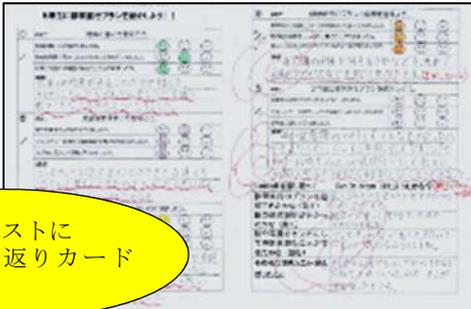


コミュニケーションポイントに気付く。
 ジェスチャー
 クリアボイス
 スマイル 等

- 5 学習したことを振り返る。
 (1) 本時に分かったことや気付いたことを伝え合う。
 (2) 振り返りカードを記入する。
 (3) 次時への見通しを持つ。

【学びを振り返る】
 分かりやすい伝え方や友だちのよかったところや、自分が言えたことなどの児童の多様な気付きを出し合い、次時への意欲へとつなげるような振り返りの時間とする。

◎CAN-DO リストに基づく振り返りカードで本時の学びを振り返る。



CAN-DO リストに基づく振り返りカードを活用



単元の CAN-DO リスト
 Lesson 6 で
 何ができるようになるのかという視点

4 研究の実際（中学校の実践から）

検証 2 合志市立合志中学校第 1 学年
 単元名 「Unit 6 オーストラリアの兄」
 (New Horizon 1 東京書籍)

(1) CAN-DO リストと本単元の関連

【表 4】合志中学校 CAN-DO リスト（一部抜粋）

	外国語表現の能力		外国語理解の能力	
	Speaking	Writing	Listening	Reading
要 中 領 学 の 校 目 学 標 習 指 導	初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話することができるようにする。	英語で書くことになれ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。	初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。	英語を読むことになれ親しみ、初歩的な英語を読んで聞き手の意向などを理解できるようにする。
卒 業 時 の 学 習 到 達 目 標	■ 聞いたたり読んだりしたことやテーマについて事実を伝えたり、意見を述べたり質問に答えたりできる。 ■ 強勢、イントネーション、区切りなどの特徴をとらえ正しく発音し、つなぎ言葉を用いたりして意見を伝えたり、事実を述べたり、スピーチなどを行うことができる。	■ 既習の英語を使用して語の区切り、文のつながりなどに注意して身近な出来事や体験、また感想や考えなどを書くことができる。	■ 情報、質問や依頼、概要や要点を聞きとり、時には話し返すなどしてまとまりのある内容を理解し聞き取ることができる。	■ 文字や符号を識別し書かれた内容を読みながら黙読したり物語や説明文、伝言や手紙、意見文などを読み取ることができる。
1 年 生 の 学 習 到 達 目 標	■ 身近な話題や特定の場面設定の中で、英語を用いたり質問に答えたりすることができる。 【やりとり】 (Unit 1・2・4・5・7・8・9/ Daily Scene 1・2・5・6)	■ 身近で書きやすい内容（自己・他者・学校紹介など）について英語で書くことができる。 (Unit 6・11/ Presentation 1・2・3)	■ 短い簡単な内容を正しく聞き取ることができる。 (Unit 1～11)	■ 正しい強勢、イントネーション等を意識して、短い英文を正しく音読することができる。 (Unit 1～11)
	■ 身近で簡単なテーマについて、自分に関する内容を英語で話すことができる。 【発表】 (Unit 3・10)	■ ハガキやカード等にふさわしい表現を用い、簡単な内容について適切に書くことができる。 (Daily Scene 3・4・7)	■ 短い簡単な内容を聞き、概要を正しく聞き取ることができる。 (Listening Activity)	■ 身近な話題について書かれた簡単な英文の概要を正しく読み取ることができる。 (Unit 1～11・Let's Read)

表4は、「合志中学校 CAN-DO リスト」を一部抜粋したものである。現行学習指導要領に示されている4技能ごとの目標をもとに、卒業時の学習到達目標及び第1学年の学習到達目標を示している。

このCAN-DOリストから、第1学年における「書くこと」を中心に据える単元とその単元におけるCAN-DOリストを洗い出した。次の表5は、第1学年における「書くこと」のCAN-DOリストである。

【表5】第1学年「書くこと」のCAN-DOリスト

<p>■身近で書きやすい内容（自己・他者・学校紹介など）について英語で書くことができる。 (Unit 6・11, Presentation 1・2・3)</p>
<p>Unit 6 自分や相手以外の人についての紹介文を書くことができる。 (4文以上の英文)</p>
<p>Unit 1 1 過去に体験したことについて書くことができる。 (4文以上の英文)</p>
<p>Presentation 1【自己紹介】 自分のことについて自己紹介文を書くことができる。 (3文以上の英文)</p>
<p>Presentation 2【一日の生活】 自分の友達の一日の様子を書くことができる。 (3文以上の英文)</p>
<p>■ハガキやカード等にふさわしい表現を用い、簡単な内容について適切に書くことができる。 (Daily Scene 3・4・7)</p>
<p>Daily Scene 3【グリーティングカード】 目的に合わせて様々なカードを書くことができる。 (3文以上の英文)</p>
<p>Daily Scene 4【ウェブサイト】 自分の学校についての紹介文を書くことができる。 (3文以上の英文)</p>
<p>Daily Scene 3【絵はがき】 旅先からの絵はがきを書くことができる。 (3文以上の英文)</p>

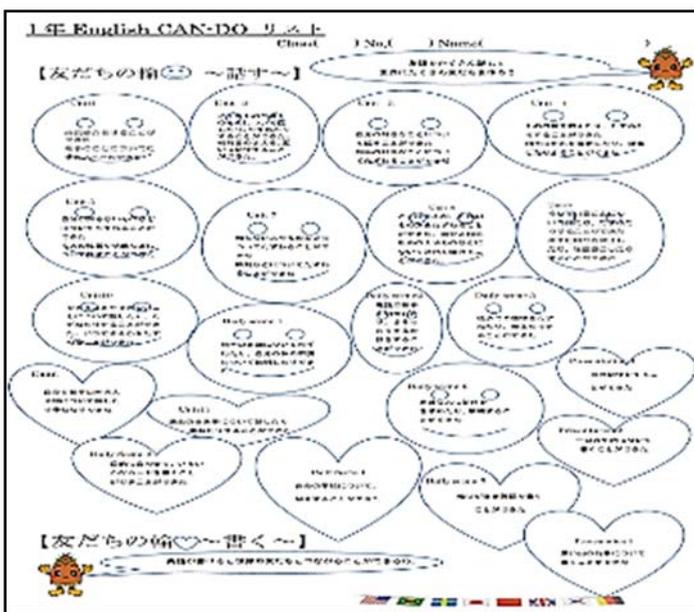
における第1学年のCAN-DOリストを生徒向けにまとめたものである。本校では「聞くこと」及び「読むこと」においては、すべての単元で見取っていくため、「話すこと」及び「書くこと」においてのみをまとめ、学習ファイルの表紙に貼り、活用している。

(2) 本単元の授業設計

本単元は、中学校学習指導要領英語科の目標「英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする」を受け、「エ 書くこと」の(オ)に留意しながら、身近な話題（他者紹介）について書くことをねらいとしている。本単元のCAN-DOリストは、「自分と相手以外の人について4文以上の英文で書くことができる」であり、言語材料は三人称単数現在形を扱う。次の表6は本単元の指導計画である。

【表6】Unit 6の指導計画

次	時	学習活動と研究の視点との関連
1	1	○自分と相手以外の人（先生）についての紹介をする。 (肯定文) 【視点1】相手意識のある言語活動の設定 【視点3】CAN-DO リストや授業の流れの提示
	1	○Unit 6-1の本文の内容を理解する。 【視点2】CAN-DO リストによる振り返り
2	1	○自分と相手以外の人（先生）について尋ねたり、答えたりする。(疑問文) 【視点1】相手意識のある言語活動の設定 【視点3】CAN-DO リストや授業の流れの提示
	1	○Unit 6-2の本文の内容を理解する。 【視点2】CAN-DO リストによる振り返り
3	1 本 時	○自分と相手以外の人（先生）についての紹介をする。 (否定文) 【視点1】相手意識のある言語活動の設定 【視点2】思考過程が見えるワークシートの工夫 【視点3】CAN-DO リストや授業の流れの提示
	1	○Unit 6-3の本文の内容を理解する 【視点2】CAN-DO リストによる振り返り
4	1	○ALT のスペンサー先生に「合志中の先生たち紹介book」をプレゼントする。 【視点1】相手意識のある言語活動の設定 【視点3】CAN-DO リストや授業の流れの提示



【図2】第1学年のCAN-DOリスト（話す・書く）

また、図2は表5の「書くこと」と「話すこと」

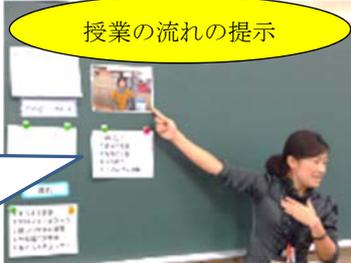
(3) 指導の実際 (Unit 6 第5時)

	<p>【CAN-DO リスト】 (書く) 身近で書きやすい内容 (自己・他者・学校紹介など) について英語で書くことができる。</p> <p>【本時の目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分と相手以外の人についてまとまりのある英文 (4文程度) を書くことができる ・三人称単数現在形の形・意味・用法に注意して文を書くことができる
<p>導入 5分</p>	<p>1 Greeting (一斉) 2 Warm Up (ペア) すらすら音読</p> <p>【学びを支える】 授業の流れを提示し、生徒が見通しを持って活動できるようにする。</p> <p>◎CAN-DO リストを用いて、本時のねらいを確認する。</p>
<p>展開 40分</p>	<p>3 本時のめあてをつかむ。(一斉) (ペア) 単元終末での目標</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 自分と相手以外の人について、まとまりのある英文 (4文程度) を書くことができる </div> <p>学習目標 (めあて)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 三人称単数現在の否定文を使って、ALT の先生に 合志中の先生たち紹介を作成しよう </div> <p>(1) Today's CAN-DO を確認する。 (2) Review 6-1, 6-2 (3) Today's Key Sentences を確認する。 (4) Pattern Practice (doesn't) をする。</p> <p>【学びを引き出す】 既習表現の Does ~? を使って友達にインタビューをし、新出文型の doesn't を用いて全員が積極的に活動できるように支援する。</p>

Unit 6 の単元の CAN-DO リスト

本時の目標 (CAN-DO リスト)

授業の流れ



Does she like cats?
 No, she doesn't.
 She doesn't like cats.
 She likes dogs.



活動を通して、一人一人が言えるようにする。

4 これまで書き上げた先生の紹介文に、新たに三人称単数現在形の否定文を書き加えるとともに、文章を再構成する。(個, ペア, グループ)

- (1) 紹介文のモデルを示す。
- (2) 先生たちから聞いたインタビュー内容を確認し、否定文を考える。
- (3) 否定文を加え、これまで書き上げた先生の紹介文を再構成する。
- (4) 書き上げたものをペア (グループ) で意見交換しながら、修正及び改善を図る。

【学びを引き出す】

お互いに意見や考えを伝え合い、ALT の先生に分かりやすい紹介文にする。



事前のインタビューから否定文を書き入れる

Ms. Yamabe likes yogurt.
 But she doesn't like tomatoes.

◎今まで使用したワークシートや Activity で作った英文を参考にしながら英作文をする。

【学びを振り返る】

友達からのアドバイスをもとに、さらにお互いの文章をより説得力のあるものにするためのポイントをもとに修正及び改善し合う。

【言語活動】 (設定の意図)

友達の英文やアドバイスを参考にしながら、まとまりのある英文を書く手立てとする。



ペアで意見交換をする



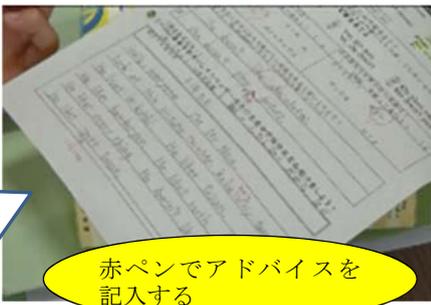
グループでさらにアドバイスして練り上げる

つづりミス

接続詞

内容的なつながり

自分のことも付け加えて



赤ペンでアドバイスを記入する

整

理

5

分

5 本時の学習を振り返る。(ペア、一斉)

(1)本時の学習で学んだことを振り返る。

(2)自己評価カードを記入する。

(3)次時への見通しを持つ。

【学びを振り返る】

授業の最初と最後に CAN-DO リストを用いて、目的を持って学習に取り組んだことを自己評価することで、「学びの振り返り」ができ、「次時への見通し」が持てるようにする。

◎CAN-DO リストに基づく自己評価カードで本時の学びを振り返る。

Unit6 CAN-DO リスト Class 1 No. 101

項目	内容	達成状況
1	自分と相手以外の人について紹介ができる	
2	...	
3	...	
4	...	
5	...	

CAN-DO リストに基づく自己評価カードを活用

1年生終了時の CAN-DO
Unit 6 の単元の CAN-DO
Unit 6 を通して、自分が分かったこと

Each introduce teachers to your classmates

(Unit 2 3 4 5 6 Show 1 2 3 4 5 6)

My name is ...

I'm ...

I like ...

...

単元の CAN-DO リスト

Unit 6 で
何ができるように
なるのかという視点

5 検証結果と考察

① 3つの視点から（小学校：外国語活動）

検証1 合志市立西合志中央小学校第6学年
単元名 「Lesson 6 What time do you get up?»
(Hi, friends! 2 文部科学省)

ア 視点1【学びを引き出す】について

○「CAN-DO リスト」に基づく相手意識のある言語活動の設定

CAN-DO リストは、「(話すこと) 数字を1～100まで言うことができる。一日の生活を英語で言うことができる。(聞くこと) 数字の1～100まで聞いて分かる。友達の生活を英語で聞くことができる。(読む) 時刻を読むことができる。」である。本単元は「一日の生活」を表現する内容であることから、児童にとって身近な話題である「修学旅行の一日」に置き換えることで、共通の経験や話題で内容を展開した。さらに、単元のゴールを「5年生におすすめ！修学旅行の一日を紹介しよう！」とすることで、5年生に伝えようという相手意識のある言語活動ができるようにした。次は、児童の授業後の感想である。

平和記念像のマネをしてどんなものだったかをより詳しくして5年生に伝えたり、ランチやディナーの時もおいしい表現をしたりして伝えた。私が言ったことに「へえ～」と目をきらきらさせて反応してくれて、とてもうれしかった。

(振り返りカードの感想より)

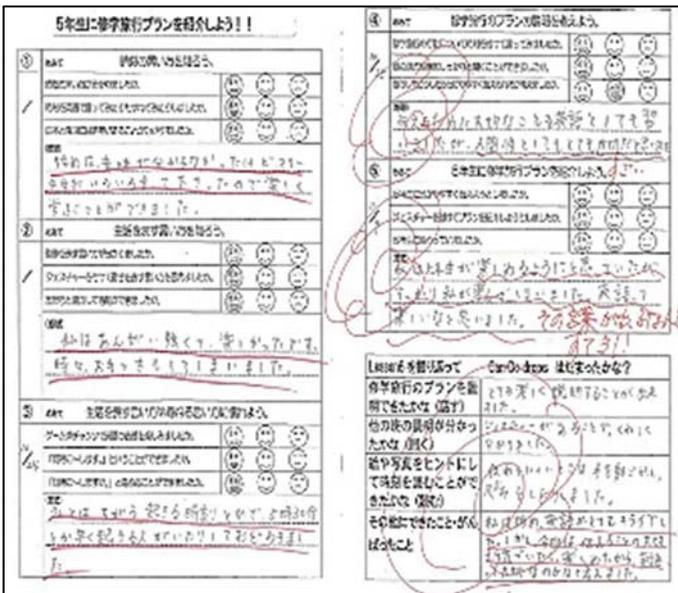
このように、相手意識のある言語活動を設定することで、児童の他者と関わりたい欲求が高まったと考える。また、主体的・対話的な学びの中で、自分の考えを提案し、他者の考えと交流し合い、相手にその内容が伝わるように工夫していくという過程の中に、他者理解の価値が生まれると捉えられる。

イ 視点2【学びを振り返る】について

- 中間評価や相互評価（コミュニケーションへの価値付け）
- CAN-DO リストに基づく振り返り



振り返りカードに、その時間の学習のねらいを明確にした振り返り項目を設定し、その中に CAN-DO リストの視点を取り入れることで、各授業及び単元のねらいが児童にも教師にも明確になった。また、振り返りカードに一次から単元終末までの目標が明記してあることで、児童自身が見通しを持って学習に取り組むことができた。単元を通して、英語を用いて何ができるようになるのか意識させることができたことは、児童の学びにつながったと考えられる。



活動の中で行う教師からの中間評価は、コミュニケーションへの価値付けを行うことができ、児童に英語活動の意図を明確にすることができた。また、児童同士による相互評価においても、コミュニケーションへの価値付けはもちろん、児童の気付きから英語を用いて何ができるようになったのかを全体で共有することができ、児童のメタ認知を促すことにつながったと考える。

ウ 視点3【学びを支える】について

- CAN-DO リストや授業の流れの提示
- ICT 等の視聴覚教材の効果的な活用



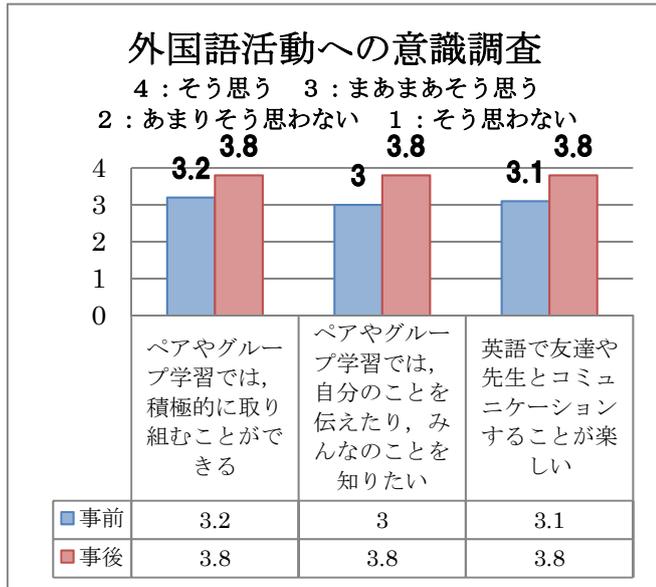
板書左側には、「ALT の先生の休日！おすすめプラン」を掲示し、その時間の主活動の導入において、ALT のデモンストレーションとともに児童に毎時間繰り返し提示した。単元のゴールについても毎時間黒板中央に掲示し、本時の目標とともに示しておいた。板書の右側にはコミュニケーションポイントとともに、本時の流れを提示した。合わせて、「CAN-DO Drops」も拡大して見せておくことで、児童の学習意欲を喚起することができた。授業の導入において、その CAN-DO リストを教師が児童とともに毎時間確認を行うことは、児童に授業や単元の見通しを持たせることができたと考える。

また、実際に自分たちが行った修学旅行の写真を紹介することで、話し手及び聞き手にとっても、英語を「聞きたい」「話したい」という意欲を高めることにつながったと考える。

板書を構造化すること、CAN-DO リストや授業の流れを提示することは、児童に先の見通しを持たせ、安心して授業に臨ませることができる手立てとなる。また、ICT の活用は児童に教材を焦点化、視覚化、共有化するのに効果的であり、絵や写真の活用においても、児童の意欲を喚起するのに大変有効であった。

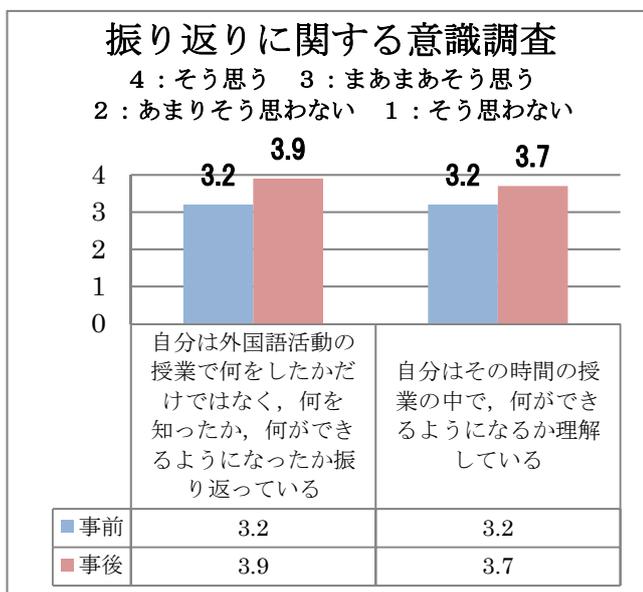


② 児童の意識調査から（小学校）



【図3】授業における意識調査：4件法（N=28）

図3は、「外国語活動への意識調査」において、肯定的な回答が増加した3項目を抽出したものである。外国語活動の授業において、教師がペアやグループ活動を意図的に取り入れていくことは、児童の学習への意欲を喚起するとともに、他者との関わりを生み出すことにつながった。また、相手意識を引き出す言語活動を設定することは、児童自身がコミュニケーションポイントを意識することにもつながったと考える。つまり、「聞きたい」「話したい」という目的意識や相手意識のある単元を貫く言語活動を設定したことで、次の授業への意欲を喚起することになっていると考えられる。

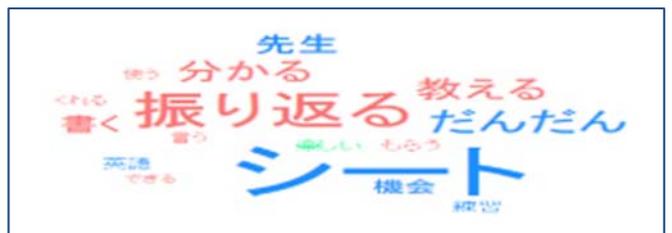


【図4】振り返りの意識調査：4件法（N=28）

図4は、「振り返りに関する意識調査」において、肯定的な回答に伸びが見られた2項目である。これらの項目から、振り返りの時間を確保すること、何を振り返るのかを児童に明確させること、そして教師と児童がその時間のねらいや単元のゴールを共有しておくことが重要であると考えられる。本研究では、CAN-DO リストに基づく振り返りカードを活用し、英語を用いて何ができるようになるのかを単元を通して、教師も児童も意識することで、できるようになったことや気づきを共有することができた。また、振り返りの場が、児童自身のメタ認知を促す機会となり、学びが深まっていったと考えられる。

あなたは、その時間に「何ができるようになるのか」理解していますか。それはなぜですか。

上の質問は振り返りに関する意識調査において、記述式で回答を求めた項目である。検証授業の事前と事後の結果をテキストマイニングで分析した（図5、図6）。

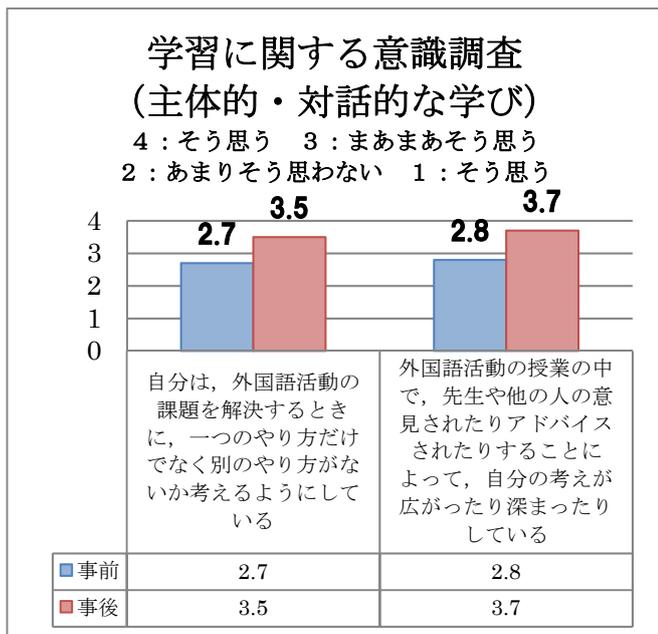


【図5】テキストマイニング：事前（N=28）



【図6】テキストマイニング：事後（N=28）

事前のテキストマイニングでは、「めあてが振り返りシートに書いてある。」「先生が教えてくれる。」「振り返るときに分かる。」という記述が見られた。事後のテキストマイニングでは、「できるようになってCAN-DO Dropsを塗りたい。」「ALTの先生のお手本がある。」「振り返るときにCAN-DO Dropsを見る。」という記述が多くあった。このことから、その時間に「何ができるようになるか。」を教師も児童も意識して授業に臨んでいたことが分かる。また、振り返りカードとCAN-DOリストを結びつけたことで、児童に慣れ親しみやすいものとなったと考えられる。



【図7】学習における意識調査：4件法（N=28）

図7に示す意識調査から、自分の考えを伝えたり、相手の考えを受け入れたりすることで、自分の考えが広がったり深まったりしながら再構築されていくということを見ることが出来る。児童同士が関わり合う豊かな言語活動は、外国語活動の本質に迫ることができると考える。

また、図8は、研究授業を終えて児童が英語を用いて何が出来るようになったかを記録したものである。この「CAN-DO Drops」では、児童自身が色の濃さを変えたり、半分だけ塗るといった工夫が見られた。児童が何がどの程度出来るようになったかを自分自身で把握できていることがうかがえる。



【図8】第6学年の「Can-Do Drops」

③ 3つの視点から（中学校：外国語科 英語）

検証2 合志市立合志中学校第1学年
単元名 「Unit 6 オーストラリアの兄」
(New Horizon 1 東京書籍)

ア 視点1【学びを引き出す】について

- 「CAN-DO リスト」に基づく相手意識のある言語活動の設定



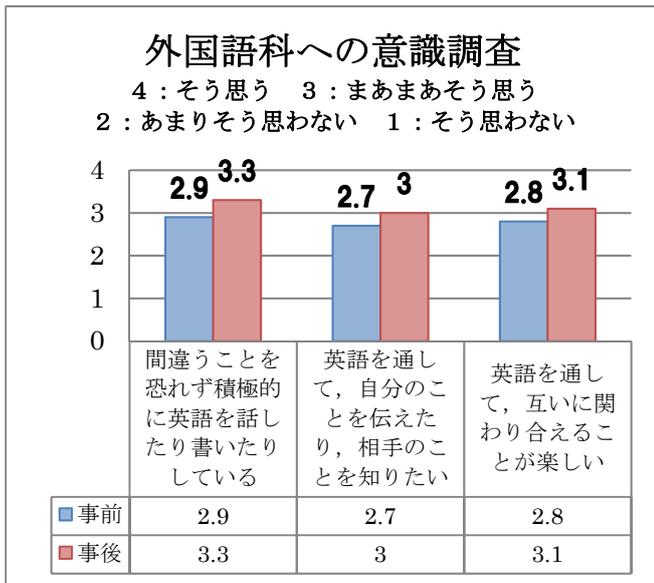
CAN-DO リストは、第1学年「身近で書きやすい内容（自己、他者、学校紹介など）について英語で書くことができる」であり、(Unit 6)「自分や相手以外の人についての紹介文を書くことができる」である。「ALTの先生に合志中の先生を紹介しよう」という相手意識のある言語活動のもと、ペアやグループで一つのトピックについて対話する活動を取り入れた。また、その学習課題解決に向けて、お互いの情報や意見、考えを伝え合い、発想を広げる活動を通して、豊かな関わり合いのある授業を展開した。今回は書く活動の取組であったので、生徒に読み手を意識させた活動とした。生徒の授業後の感想は、次のとおりである。

- ・ 結構英文が書けることが分かった。
- ・ 先生以外の他己紹介がしたくなった。
- ・ 他者紹介を、ぜひ生活の中で生かしたい。
- ・ 人を紹介する時はジェスチャーもつけるとよい。

(自己評価カードの感想より)

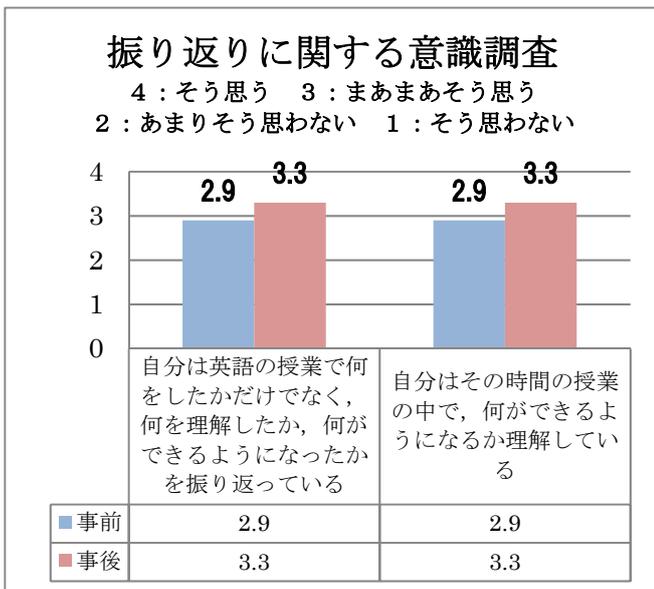
相手意識を持たせた言語活動を設定することで、単元の終末時まで、生徒が意欲的に書く活動に取り組むことができた。学習内容を理解するとともに、学んだことがどのように使えるのかにも、考えが及んでいることが分かる。

④ 生徒の意識調査から（中学校）



【図9】授業における意識調査：4件法（N=28）

図9は、「外国語科への意識調査」について、肯定的な割合が増加した3項目を抽出したものである。「間違えることを恐れず積極的に英語を話したり書いたりしている」が0.4ポイント上がった。本単元で書く活動に迫ったことによる生徒の意識の変容である。また、CAN-DOリストに基づき相手意識のある言語活動を設定し、主体的・対話的な学びから、英語を通して「自分のことを伝えたい」「相手のことを知りたい」「互いに関わり合えることが楽しい」という項目で学習意欲の高まりが見られた。生徒の学習意欲を喚起する言語活動が重要であることが分かる。



【図10】振り返りの意識調査：4件法（N=28）

図10は、「振り返りに関する意識調査」について、肯定的な回答に大きな伸びが見られた2項目を抽出したものである。両項目とも、検証授業後には2.9から3.3となり、0.4ポイント上がった。生徒が授業において、何をしたかだけでなく、何を理解したか、何ができるようになったかを振り返ることは、各々の学びを促進することにつながったと考える。振り返りを行うことで、学習へのメタ認知を促すとともに、次の学習へつなげることができ、自律的学習者の育成につながる。CAN-DOリストに基づく授業展開により、生徒は自律的学習者として主体的に学習する態度や姿勢を身に付けることができていると考える。

あなたは、その時間に「何ができるようになるのか」理解していますか。それはなぜですか。

上の質問は振り返りに関する意識調査の中で記述式にした項目である。検証授業の事前と事後の結果をテキストマイニングで分析した（図11、図12）。

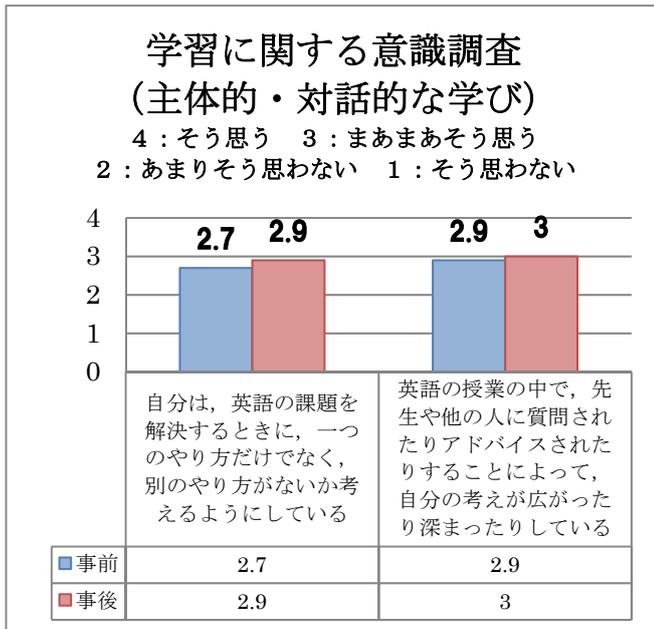


【図11】テキストマイニング：事前（N=28）



【図12】テキストマイニング：事後（N=28）

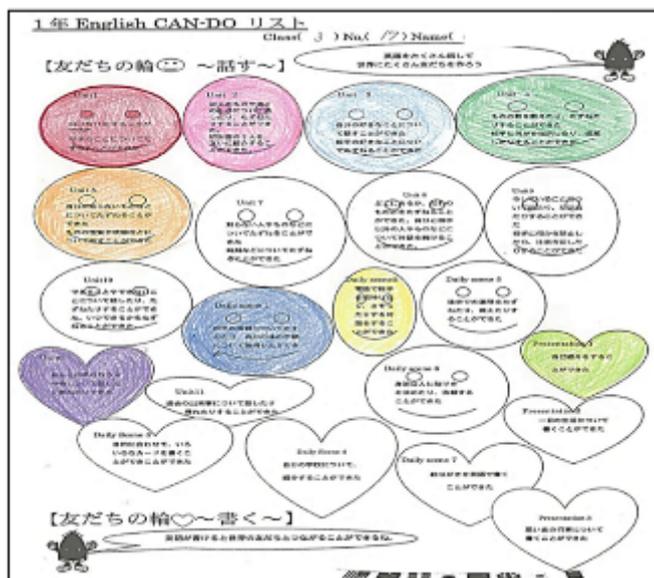
事前のテキストマイニングでは、「授業に集中して取り組んでいる。」「予習や復習をしている。」「授業で先生が言う。」という記述が見られた。事後のテキストマイニングでは、「自己評価カードで振り返る。」「CAN-DOリストを振り返る。」「CAN-DOリストが黒板に書いてある。」という記述が多かった。このことから、その時間に「何ができるようになるか」を教師も生徒も意識して授業に臨み、CAN-DOリストに基づく自己評価カードの導入が効果的であったと考える。



【図13】学習における意識調査：4件法（N=28）

図13に示す意識調査から、互いに関わり合う言語活動を通して、自分の考えが広がり深まったりしながら、自分の考えが再構築されていくということを生徒が実感していることが分かる。他者との学び合いによる書く活動が展開できてきている。

また、図14は「友達の輪」と題し、「話すこと」と「書くこと」に特化したCAN-DOリストから各単元レベルのCAN-DOリストを洗い出したものである。検証授業を終えて、生徒は「この単元では〇〇ができるようになったよね。」と友達と話しながら記録していた。英語を用いて何ができるようになるかという視点から、振り返りを行い、自身の学びを振り返るものとなっていた。



【図14】第1学年のCAN-DOリスト（話す・書く）

⑤ 教師の意識調査から（小学校／中学校）

ここではCAN-DOリストの活用から見える、本研究における教師の変容について述べる。検証授業の事前事後と教師の意識調査を行った。次の表7はその調査項目の中で特に教師の意識の高まりが見られたものを、「導入」、「展開」、「まとめ」、「CAN-DOの視点」に分けて示しているものである。

【表7】教師の意識の高まりが見られた調査項目

導入	○各単元の学習課題を決めている。 (単元を見通した課題)
	○毎時間の学習の「めあて(目標)」や「CAN-DO」を提示している。
展開	○児童生徒が興味を持つようなトピック(話題)を設定している。
	○児童生徒が自分の考えを伝える場面や友達の考えを聞く場面を設定している。
まとめ	○児童生徒がその時間に学んだことを振り返り(自己評価)カードに書く時間を設けている。
	○児童生徒が英語を用いてできるようになったことを意識して振り返る時間を設けている。
CAN-DOの視点から	○CAN-DOリストを意識した授業改善を心がけている。
	○単元の終わりの具体的な児童生徒の姿をイメージして授業をしている。
	○単元の見通しを持ち、毎時間がつながりのある構成となっている。
	○単元(年間)を通して、生徒に身に付けさせたい力がある。
	○児童生徒が英語を用いて様々なパフォーマンスをする機会を設定している。

「CAN-DOリストの視点から」の調査項目では、教師が授業づくりにおいて、単元の見通しを持ち、児童生徒が英語を用いて何ができるようになるかという具体的な姿をイメージしながら、一時間一時間の授業を構成していることが分かる。また、教師が単元を通して、児童生徒が英語を用いて話したり、書いたりする様々なパフォーマンスをする機会を設定する必要性や、授業のつながりを意識していることがうかがえる。検証授業において、授業者は、単元はもとより年間を通して児童生徒に身に付けさせたい力を意識しながら、授業づくりを行っている。

授業を組み立てる上で大切にしていることは何ですか？

上の質問は授業づくりに関する意識調査の中で、記述式で回答を求めた項目である。検証授業の事前と事後の結果を示す。

- ・楽しみながら活動ができること
- ・男女関係なくコミュニケーションをとること
- ・生徒がお互いに、英語でコミュニケーションがとれるような力がつく授業

(事前の意識調査より)

- ・楽しみながら活動ができること
- ・その単元を通して児童が何ができるようになるのかを意識すること
- ・単元のゴールに向かって毎時間何を学習すべきかを考えて授業を行うこと
- ・様々なパターンで繰り返し練習し、児童が自信を持って英語を言えるようにする
- ・分からないときや伝わらないときでも、何とか自分の言いたいことを伝えよう、相手の言いたいことを理解しようするなどの態度の育成
- ・生徒が主体的に学び、そして楽しく意欲的に活動できるような授業
- ・単元を通して、学ぶこと(内容)が系統づけられていること
- ・年間を通して、つながりのある単元構成
- ・生徒の活動時間が十分確保できる授業
- ・Classroom English や学んだ英語が将来どのような場で役立つのか、生徒にも想像させながら学ぶスタンスをつくること

(事後の意識調査より)

(下線部は筆者による)

事前事後の教師の意識調査から、授業デザインに関するコメントが多く見られる。言語活動の設定、単元構成、一時間一時間の授業展開、パフォーマンス評価、そのすべてを貫くものは「英語を用いて何ができるようになるか」という CAN-DO リストが示すものである。CAN-DO リストで示された学習到達目標のために、どのようにしてねらいに沿った言語活動を取り入れるのか、授業を組んでいくのか、学習内容に系統性を持たせていくのか、そこに教師の授業デザインが発揮されると考える。

6 研究のまとめ

今回の研究では、CAN-DO リストの活用を通して、児童生徒の英語学習への意欲を高める授業デザインがどうあるべきか、検証を行った。CAN-DO リストを意識することで、年間を見通して4技能を育成する言語活動が充実し、単元計画を考え、一時間一時間の授業を展開していく、バックワードデザインによる授業デザインへとつながっている。

小学校の実践においては、一日の生活を表す表現を使って、5年生に修学旅行の一日を伝えるという相手意識のある学習課題を設定して授業展開した。また、中学校の実践においては、他者紹介の書くことに迫るために、各時間において教師が意図的に書く活動を取り入れていった。さらに、CAN-DO リストを各単元において、振り返りカードや自己評価カードに取り入れたり、毎時間の授業で板書等により提示したりした。そのことで、児童生徒と教師が目標を共有することができた。

次の感想は、小学校の実践において、授業後に児童が家庭で CAN-DO リストを見せながら、英語を話したり聞いたりした、保護者からのものである。

- ・時刻を読むことができました。色塗りしてあるところを見るといろんなことができるようですね。すごいです！卒業まで CAN-DO Drops を塗り上げよう。
- ・英語の勉強をしているとは聞いていましたが、ここまで奥深い勉強をしているとは初めて知りました。将来が楽しみです。

(保護者からの感想より)

CAN-DO リストは保護者とも共有することが求められており、このような家庭での児童への言葉かけは、児童のさらなる学習意欲を喚起することにもつながっていると考えられる。

しかしながら、実践を通して、様々な課題も見えてきた。CAN-DO リストの一つのねらいでもある教師同士の CAN-DO リストの共有である。英語教育に携わるすべての教師が、児童生徒の実態を踏まえた上で、育成したい能力や目指す児童生徒像、指導と評価の方法を共有することが必要である。学校全体で CAN-DO リストの捉えを明確にし、それに基づいた共通の授業実践が必要である。また、学習到達目標を指導と評価に反映させていくために、学習到達

目標に対応した評価方法（筆記のみならず，面接，エッセー，スピーチ等のパフォーマンス評価，行動の観察等）をさらに研究していく必要がある。

さらに、「審議のまとめ」において、『「外国語」等における小・中・高等学校を通じた国の指標形式の目標』が明記されているように，小中高を通じて，英語を用いて何ができるようになるかという児童生徒の具体的な姿を，児童生徒はもちろん，教師，家庭とも共有しながら，児童生徒の学びを深めていかなければならない。

CAN-DO リストの最大のねらいは，授業改善につながることである。今後，CAN-DO リストのねらいを周知するとともに，実際に活用することで，授業がどのように改善されるのか，まず教師自身が実感することが重要であると考えます。

今回の研究で得られた成果と課題を踏まえて，次年度の研究を進めていきたい。

《引用・参考文献》

- 1) 文部科学省（2016）『次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ』 p. 253
- 2) 文部科学省（2016）『次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ』 p. 268
- ・文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説外国語活動編』
- ・文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説外国語編・英語編』
- ・文部科学省（2010）『高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編』
- ・文部科学省（2013）『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』
- ・文部科学省（2014）『今後の英語教育の改善・充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』
- ・熊本県教育委員会（2015）『平成 27 年度英語教育実施状況調査』
- ・文部科学省（2015）『小学校高学年補助教材 Hi, Friends! Plus』
- ・東京書籍（平成 28 年度版）『NEW HORIZON 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標』